

うしろうり 外郎売

拙者親方と申すは、お立会いの中に、御存じのお方もござりましようが、
お江戸を発つて二十里上方、相州小田原一色町をお過ぎなされて、
青物町を登りへおいでなされるれば、

欄干橋虎屋藤衛門、只今は剃髮致して、円齊と名のりまする。

元朝より、大晦日まで、お手に入れます此の薬は、

昔、陳の国の唐人、外郎という人、わが朝へ来たり、

帝へ参内の折りから、この薬を深く籠め置き、

用ゆる時は一粒ずつ、冠のすき間より取り出だす。

よつてその名を帝より、透頂香と賜わる。

即文字には「頂き、透く、香い」と書いて「透頂香」と申す。

只今はこの薬、殊の外、世上に弘まり、

方々に偽看板を出だし、イヤ、小田原の、灰俵の、さん俵の、炭俵のと、

いろいろに申せども、平仮名をもつて「うしろう」と記せしは、親方円齊ばかり。

もしやお立会いの中に熱海か塔の沢へ、湯治にお出なされるか、

または伊勢御参宮の折からは、必ず門違いなされまするな。

お上りならば右の方、お下りなれば左側、

八方が八つ棟、表が三つ棟玉堂造り。

破風には菊に桐の臺の御紋を御赦免あつて、系図正しき薬でござる。

イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、

ご存知ない方には、正身の胡椒の丸呑み、白河夜船、

さらば一粒食べかけてその気味合いをお目にかけますよう。

先ずこの薬をかように一粒舌の上のせまして、

腹内へ納めますると、イヤどうも言えぬは、

胃・心・肺・肝がすこやかになりて、

薫風候より来たり、口中微涼を生ずるが如し。

魚鳥・茸・麵類の食い合わせ、その外、万病速効ある事神の如し。

さて、この薬、第一の奇妙には、舌のまわることが、銭独楽がはだしで逃げる。

ひよつと舌がまわり出すと、矢も楯もたまらぬじや。

そりやそりや、そらそりや、まわってきたわ、まわってくるわ。

アワヤ候、サタラナ舌に、カ牙サ歯音、

ハマの二つは唇の軽重、開合さわやかに、

あかさたな はまやらわ、おこそこの ほもよろお。

一つへぎへぎに、へぎほし、はじめみ、盆豆、盆米、盆ごぼう、

摘み蓼、摘み豆、摘み山椒、

書写山の社僧正、

粉米のなまがみ 粉米のなまがみ こん粉米の小生がみ、

繻子・緋繻子・繻子・繻珍、

親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、親かへい子かへい子かへい親かへい、

古栗の木の古切口、雨合羽か番合羽か、

貴様の脚絆も皮脚絆、我等が脚絆も皮脚絆、

しっ皮袴のしっほころびを、三針はり長にちよと縫うて、ぬうてちよとぶんだせ、

河原撫子 野石竹、のら如来 のら如来、三のら如来に六のら如来。

一寸先のお小仏に、おけつまずきやるな、細溝にどじよによりり。

京の生鱈 奈良生学鯉、ちよと四五貫目、

お茶立ちよ茶立ちよ ちゃつと立ちよ茶立ちよ、青竹茶筌でお茶ちやと立ちよ。

来るは来るは何が来る、高野の山のおこけら小僧、

たぬきひやつびき 箸百膳、天目百杯 棒八百本。

武具・馬具・ぶぐ・ばぐ・三ぶぐばぐ、合わせて武具・馬具・六ぶぐばぐ、

菊・栗・きく・くり・三菊栗、合わせて菊・栗・六菊栗、

麦・ごみ・むぎ・ごみ・三むぎごみ、合わせてむぎ・ごみ・六むぎごみ。

あの長押の長薙刀は、誰が長薙刀ぞ。

向こうの胡麻がらは、荏の胡麻がらか、真胡麻がらか、

あれこそほんとの真胡麻殻。

がらびいがらびい風車、おきやがれこぼし おきやがれ小法師、

ゆんべもこぼして 又こぼした。

たあふほほ、たあふほほ、ちりから、ちりから、つつたつぽ、

たつぽたつぽ一干だこ、落ちたら煮て食お、

煮ても焼いても食わぬ物は、五徳鉄弓・かな熊童子に、

石熊・石持ち・虎熊・虎きす、

中にも 東寺の羅生門には、茨木童子がうで栗五合、つかんでお蒸しやる。

彼の頼光の膝元去らず。

鮎・金柑・椎茸、さだめて後段な、

そば切り、そうめん、うどんか、愚鈍な小新発知、

小棚の、小下の、小桶に、こ味噌が、

こ有るぞ、小杓子、こ持って、こ掬って、こよこせ、

おっと合点だ、心得たんぼの川崎、神奈川、程ガ谷、戸塚は、

走って行けば、やいとを摺りむく、三里ばかりか、

藤沢、平塚、大磯がしや、

小磯の宿を七ツ起きして、早天早々相州小田原とうちん香、

隠れござらぬ貴賤群衆の、花のお江戸の花ういろいろ、

あれあの花を見てお心を、おやわらぎやという。

産子、這う子に玉子まで、此の外郎の御評判、

ご存知ないとは申されまいつぶり、

角出せ、棒出せ、ほうほうまゆに、

白・杵・すりばち、ばちばちくわばらくわばらと、

羽目を弛して今日お出での何れも様に、上げねばならぬ売らねばならぬと、

息勢引っぱり、東方世界の薬の元締め、薬師如来も上覧あれと、

ホホ敬って、ういろうは、いらっしやいませぬか。